# #009 お天気雑記帳

## シーボルト

記録に残っている中で、最も被害が大きかった台風は、文政11年8月9日(1828年9月17日)に長崎県中部に上陸し、日本海に抜けた台風です。激しい風と有明海の高潮などで九州北部の諸藩の死者数は2万人に達しました。特に被害が大きかったのは佐賀藩で、幕府に届け出た記録に、横死(家屋の倒壊、土砂災害などで亡くなった人)7,901人、溺死2,266人、焼死115人とあります。シーボルトの収集品を積み込むことになっていた蘭船コルネリウス・ハウトマン号が、この台風で座礁したことから、シーボルト台風と呼ばれています。

8月9日の深夜から翌朝にかけて、長崎は暴風雨になりました。シーボルトは、自宅の二階が壊れたため、平屋になっている玄関の荷物の間に身を潜めていました。家が壊れる少し前に気象観測をし、「気圧28吋1分・気温華氏77度・湿度97度・東南の激しい風」の記録を残しています。前日8日、晴天の日の記録が「気圧29吋73分」となっており、これを平常時の平均的な気圧と仮定すると、台風通過時の長崎の気圧は950hPa程度になり、非常に強力な台風であったことがわかります。

「蘭船を引き揚げることができる者は申し出よ!」とのお達しがあり、最初に応募してきたのは3人の大工。ところが、慣れぬ仕事。作業が難航し、結局、失敗してしまいます。次に応募してきたのが、なんと時計職人の御幡栄三。時計屋のオヤジがする仕事とは思えないのですが、そこは機械の専門家、みごとに引き揚げました。

昔、歴史の時間に「引き揚げた船の積み荷の中から伊能忠敬の日本地図が発見されて、シーボルト事件が起こった」と習った記憶があります。事件の経過を追ってみると、この説がかなり怪しいことがわかります。11月15日に船を引き揚げたのですが、その前の10月10日にシーボルトに地図を渡したとされる幕府天文方の高橋景保が江戸で逮捕されているからです。

最近出版されている図書の多くは、事件の発端は「コルネリウス・ハウトマン号の座礁」ではなく「間宮林蔵の嫉妬」という説を紹介しています。

高橋景保の父の高橋至時は、伊能忠敬に測量法を教えた先生です。若くして亡くなったため、さらに若い高橋景保が幕府天文方を引き継ぎました。高橋景保はエリート家系の超エリートでした。伊能忠敬は、孫のような高橋景保を「先生」と呼び慕っていたそうです。

一方、伊能忠敬の弟子の間宮林蔵は、下級の隠密で、乞食や現地人に変装して苦労して調べた蝦夷地の調査成果を高橋景保に横取りされたため、高橋景保のことを嫌っていたようです。

ある日、高橋景保を経由して、間宮林蔵のもとにシーボルトからの小包が届きます。間宮林蔵は開封せずに奉行所に届け出ています。中身は、更紗一反と「間宮林蔵の業績を尊敬している」「北方の植物の資料があればゆずってほしい」という手紙。手紙の内容は問題なかったのですが、これを機に、奉行所がシーボルトと高橋景保の関係を調べ始め、ついに大事件に発展します。なお、高橋景保は、獄中で死亡したものの、その死体は塩漬けにされ、1年以上も経って、関係者の取り調べが終わった後に打ち首になっています。

「間宮林蔵は、規則に従って奉行所に小包を届け出ただけ」という好意的な説もあるのですが、私はこの説には賛成できません。シーボルトが高橋景保に接近していることは、間宮林蔵を含めた多くの関係者が知っていたはず。高橋景保が西洋の貴重な情報を入手する見返りにシーボルトに地図を渡したことも、薄々知っていたと思います。間宮林蔵は奉行所に訴え出る機会をうかがっていたのではないでしょうか。シーボルトから届いた小包を奉行所に届け出るとき、いろいろな話をしたと思われます。高橋景保の違法行為を見過ごせないという気持ちもあったと思いますが、それ以上に、超エリート高橋景保に対する嫉妬があったのではないでしょうか。

師を慕う伊能忠敬の強い希望で、伊能忠敬の墓は上野の源空寺の高橋至時の墓の隣にあります。脇に小さな高橋景保の墓があり、その近くに、幕末に再来日したシーボルトが建てた石碑があります。その石碑にシーボルトの謝罪と後悔の言葉が刻んであります。

気象予報士 (株)富士ピー・エス顧問 松嶋 憲昭